

〈翻 訳〉

ユーラシア草原中東部における車輛岩画の分布と特性

Analyzing the Characteristics of Rock Paintings in Central-Eastern Eurasian Grassland

特日根巴彦尔 (Terigenbayaner) 著

王 達来 (Wang Dalai) 訳

概要

本稿は、特日根巴彦尔 (内蒙古博物院) 氏による「欧亚草原中東部地区車輛岩画的分布特点及内容分析」(『草原文物』2012 年第 2 期) を翻訳したものである。ユーラシア大陸の中西部から黄河流域へ伝わる車の伝播ルートは複数ある。具体的には、「アルタイ山脈－ハンガイ山脈－ゴビ砂漠 (モンゴル国南部、中国内モンゴル自治区北部)」という北路、「天山山脈－河西回廊」という中路と「パミール高原－チベット高原－河西回廊」という南路が挙げられる。しかし、岩画にみる二輪車と四輪車とでは伝播ルートと時期が異なり、四輪車はアルタイ山脈北麓を中心に東へ広まり、ゴビ砂漠にとどまる。

Abstract

I suggest that there were several routes where vehicles had been imported to Mongolia (Yellow river area) from the central and western areas of Eurasia. The northern route is "Altai Mountains - Khangai Mountains - Gobi area of Mongolia (southern part of Mongolia and the northern-central part of Inner Mongolia of China)". The middle and southern routes are "Tianshan Mountains - Hexi Corridor" and "Pamirs - Northern Qinghai - Tibet plateau - Hexi Corridor". The import route and period of two-wheeled chariot and four-wheeled chariot are quite different. The import route of two-wheeled chariot are the same with the above-mentioned three routes, while four-wheeled chariot have only been imported through the northern route, to the Mongolian Gobi area (In China, it has only been found in petroglyphs of Toin Lamyn Sum-Oloon-ovoo area in Inner Mongolia.) The culture of four-wheeled chariot have not been imported to the Yellow River area.

はじめに

車は発明から普及まで長い年月を要した。その歴史について、まだ不明の部分が多い。しかし紀元前 4000 年頃、ドイツの Lohne で発見された墓石には、二頭の牛が牽く車の図形がある¹。紀元前 2500 年頃のメソポタミア・シュメール文明期のウル王墓から出土したスタンダードに描かれた戦争の図には、四頭の馬 (アジアノロバとする説が有力) が牽く四輪車がある²。この円盤状板車輪には

ル高原に分布している（図一）。これらの岩画は、カザフスタンの Karakyr、キルギスの Ala-Too、タジキスタンのパミール高原北部の Tekke-Tash、新疆の Tarbagatai と karlik などの地域に集中している。1805 年、カザフスタンのエルティシ川流域の Smolianka 河岸で G.I.Spaskii⁸ による岩画の発見以来、カザフスタンの南カザフスタン岩画^{9 10 11}、キルギスの天山山脈中東部の Ala-Too 岩画¹²、タジキスタンのパミール高原の岩画¹³が相次発見された。これらの岩画には、車輛図形が数多く存在する。一方、中国では 1914 年と 1928 年の英国のスタインとスヴェーデンのフォルケ・ベリイマンの新疆天山南麓の庫魯克山における岩画の発見は知られているが、当該地域における本格的な調査は、20 世紀 50 年代からである¹⁴。続いて、蘇北海、王炳華らは新疆の阿克蘇、塔城地区の天山岩画に考察を行い、車輛岩画が 2 枚発見された¹⁵。本稿では、当該地区の 25 枚の車輛岩画、即ち 27 点の車輛図形を用いて検討を行う。

南カザフスタン岩画（図二、1）¹⁶ 単轆二輪駝車。車軸は半円形輿の後方に描かれる。車轆の先端に衡があるが、輓がない。車轆の両側に二頭の駱駝が描かれる。駱駝は轆に寄り掛け、その四肢が外側にひられ、首が衡の両端に振り向く。このような轆をセンターにして左右対称に描く図形は、ユーラシア草原地帯によく見られるスタイルであり、南アジア、西アジア、北アフリカ及び北欧などの地域でも類例が認められる（図三）。記述の便宜上、これからこのスタイルの図形を「典型的なスタイル」と呼ぶ。車輪には 4 本の輻が描かれ、C 型車輪と判断した学者もいる^{17 18}。筆者は、龔纓晏¹⁹の「横輻（Cross-bar）式車輪」という見解を認め、車軸と車輪が同時に動く強化幅木車輪（表一、B 型）と考えている。B 型車輪は、20 世紀 60 年代の中国内モンゴル自治区のウジムチン、ヘシグテン地区に使われていた²⁰。なお、モンゴル国のハンガイ山一帯では現在も使用されている（図四）²¹。これと同様の車輪は、内蒙古博物院所蔵の清代のモンゴル人の遊牧生活を描いた「草原生活図」にもみられる²²。

南カザフスタン岩画（図二、5）²³ 単轆二輪車。車轆の先端に「コ」の字型の衡が描かれ、衡の下に「人」字型の輓が描かれる。牽引家畜は描かれていない。車軸は円形輿の中心部に描かれている。車輪は Ba 式である。

南カザフスタン岩画（図二、14）²⁴ 単轆二輪馬車。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルではない。一頭の馬の四肢は轆に寄り掛け、もう一頭の馬の背中も轆に寄り掛けている。川又正智の指摘によると、このような牽引家畜の描き方は珍しいという²⁵。

南カザフスタン岩画（図二、16）²⁶ 単轆二輪馬車 3 台。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車輪は Ba 式である。平行する二輛の車に矢を放つ人がいる。前方の車には馭者が描かれ、手に 2 本の手綱を取って馬を操る様子から狩猟の場面だと考えられる。

Ala-Too 岩画（図二、18）²⁷ 単轆二輪車。車軸の後部に円形輿が描かれる。各車輪には 6 本の輻がある。轆の先端に衡が描かれ、その両側に 2 本の「V」字型の線が轆の中部から衡の両端まで伸びる。これは馬車具に違いないが、正確にどの部分に当たるか、ここでは判断できない。ユーラシア草原中東部には、このような「V」字型の線が描かれる図形が多くあり、特に B 地区と C 地区によく見られる。これは車の変遷過程を考察する際、非常に重要であろう。

Ala-Too 岩画 (図二、19) ²⁸ 単轆二輪馬車。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車軸は輿の中心部に描かれる。二輪の中の一つには 8 本の輻が描かれ、もう一つには Ba 式と推測できるものが描かれている。同じ車に違うスタイルの車輪を描くのは考えがたい。これは省略して表現しているのか、風化して破損が激しいため拓本によく写っていないのか、解決するのに綿密な考察が必要であろう。

パミール高原の岩画 (図二、21) ²⁹ 単轆二輪馬車。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車軸は円形輿の中心部に描かれる。二輪の中の一つは Bb 式だが、もう一つは判断できない。また衡、輓などの部分は全く描かれていない。

パミール高原の岩画 (図二、23) ³⁰ 単轆二輪馬車。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車軸は半円形輿の後方に描かれる。車輪は C 型である。輿の後方に腕を上げながら手に手綱を操る馭者が描かれている。図の構成からみると南カザフスタンの Arpauzen (図二、16) とモンゴル国の ヤマーンオソ (図七〈二〉、45、46)、テブシオーラ (図八〈一〉、12)、内蒙古の道頭山 (図八〈一〉、45)、青海の廬山 (図七〈二〉、55、66) などのユーラシア草原中東部に見られるスタイルと異なり、馭者の頭が車の走行方向の反対向きに、両足が輿の方向に、両脚が輿の後方に描かれる。家畜の頭部にある衡の 2 本線での表現に注目する。このような衡が二つある車は、中央アジア、西アジアで現在でも使用されている (図五) ³¹。

新疆伊米里河岩画 (図二、17) ³² この岩画には二輪と車軸が描かれ、車輪は Ba 式である。車軸の上に一人が立ち、その横に鹿がいる。

A 地区車輛岩画の共通性を以下のようにまとめる。

- (1) 単轆車が圧倒的が多い。27 点の中、単轆車が 22 点あり、残りの 5 点については詳細が分からない。
- (2) B 型車輪は多数を占める。27 点の中、B 型が 15 点あり、C 型が 3 点あり、残りの 9 点については詳細が分からない。
- (3) 牽引家畜の描き方には典型的なスタイルが多い。牽引家畜が描かれた 17 点の中、典型的なスタイルが 14 点ある。このようなスタイルは、ユーラシア草原地帯の岩画にあるほか、中国の甲骨文字、金文に刻まれた車馬図形にも見られる。例えば、内蒙古赤峰市寧城県南山根 102 号墓 ³³ から出土した「駕車首領紋」骨板の馬車も典型的なスタイルである (図六)。

A 地区車輛岩画の特徴をまとめると以下ようになる。

- (1) 計 4 台の車には制馭用具が描かれている。
- (2) 計 6 台の車には人物が描かれ、そのうちの 4 人が馭者と考えられる。
- (3) 当該地区の車輛図形の一部には「V」字型の線が描かれ、轆の中段から衡まで伸びる。南山根 102 号墓の刻紋骨板にもこのような「V」字型の線が描かれている。これは車体部品なのか、制馭用具なのか、特定するのにさらなる考察が必要であろう。

二、B 地区の車輛岩画

B地区の車輛岩画は、エニセイ川の中上流域のサヤン山脈、タンヌ・オーラ山脈、ハンガイ山脈中西部、アルタイ山脈中西部、天山山脈東麓及びチベット高原中北部に分布している（図一）。これらの岩画は、ロシア境内のエニセイ川流域、アルタイ共和国のカトゥニ川流域、トゥヴァ共和国のエニセイ川の支流 Chinge 川流域、モンゴル国のフブスグル県、オブス県、バヤン・ウルギー県、ホブド県、ゴビ・アルタイ県及びアルハンガイ県にまたがるタンヌ・オーラ山脈、アルタイ山脈とハンガイ山脈、中国の新疆ウイグル自治区内のアルタイ山脈西南麓、天山山脈東麓、甘粛省嘉峪関市境内の北山南麓、青海省海西蒙古族自治州境内の青海南山、格爾木市境内の崑崙山東麓、チベット自治区那曲地区のタンラ山脈西麓などの地域に集中している。20世紀60年代以来、B地区に多くの学者が調査を行っていた。例えば、В.В.радловとИ.А.Даволиттによるロシア境内のエニセイ川の流域、サヤン山脈、タンヌ・オーラ山脈及びアルタイ山脈西麓地区における調査、В.В.Волков、Э.А.Новгородова、Ц.Доржсүрэн、Д.Дорж、А.П.Окладников、Т.СанжмятавとД.Цэвээндоржのモンゴル国境内のアルタイ山脈、ハンガイ山脈における調査、蘇北海、湯恵生、張志堯及び楊恵福の中国境内のアルタイ山脈南麓、祁連山及びチベット高原の中北部における調査が挙げられる。本稿では、当該地区の61枚の車輛岩画、即ち76点の車輛図形を用いて検討を行う。

エニセイ川流域岩画（図七〈一〉、1）³⁴ 双轅二輪駝車。この図形は側面からの表現であり、右側の轅と車輪しか見えない。車輪は黒丸で描かれ、車輪型式はB型とC型のどちらかの簡略であろう。方形の輿に小さな黒丸で車の中に座る人あるいは馭者が表現されている。蓋山林³⁵はこの図形について突厥時代のものだと述べているが、筆者は的確な考察が必要だと考えている。

カトゥニ川流域岩画（図七〈一〉、2）³⁶ 単轅二輪馬車。車軸は方形輿の中心部に配置する。車輪はBa式である。車轅の先端に衡が描かれる。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。図形から車軸の先が車輪より突き出ていることが分かる。

チンゲ（Chinge）川流域岩画（図七〈一〉、5）³⁷ 単轅二輪馬車。車軸は円形輿の中心部に配置する。車輪はC型である。この車の輿とつながっている轅の後部の「U」字型が興味深い。おそらく、車轅は2本の棒であり、日本国立民族学博物館所蔵のトルコ単轅車に類似性が求められる（図五）³⁸。車轅の先端に衡が描かれ、衡の上に軛がある。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルではないが、この車と同じChinge川流域のSayan-Chyuryega地区で発見された馬車の図形は典型的なスタイルである（図七〈一〉、8）。

チュルーツ川流域岩画（図七〈二〉、35）³⁹ 単轅二輪馬車2台。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。円形輿の後方に馭者のような人がある。

ヤマーンオソ（Ямаан усны хадны зураг）岩画（図七〈二〉、45）⁴⁰ 単轅二輪馬車。車軸は方形輿の中心部に配置する。二輪には同じく8本の輻が描かれる。車輪はC型である。輿の後方に馭者が描かれ、頭は車の後方に向き、脚は輿のほうに向いている。車轅の先端に衡が描かれ、衡の上に牽引する四頭の馬が描かれている。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。衡の両端から轅の中段まで描かれる「V」字型の線刻は南カザフスタンのKol-Bulak（図二、15）、ギルギスのAla-Too（図二、18）、モンゴル国のChagan川（図七〈二〉、42-44）及び内蒙古の夏哈尼努如（図八〈一〉、

6) などの岩画にも見られる。

ヤマーンオソ (Ямаан усны хадны зураг) 岩画 (図七〈二〉、50)⁴¹ 双轡二輪馬車。図形には轡が描かれていないが、三頭の馬が牽く表現と描き方から轡が二つあると推測する。車輪には8本の輻が描かれる。車輪はC型である。円形の輿の上に幌が付けられ、その前方に馭者のように人物がいる。また車の前後に乗馬する人も描かれている。岩画の年代については、B.B.Волков、Э.А.Новгородова、Д.ДоржとТ.Санжмятавらは6台の中、4台(図七〈二〉、45-48)が紀元前2000-前1000(青銅器時代から早期鉄器時代にあたる)と、2台(図七〈二〉、49、50)が匈奴の時代だと推定している。

烏吐布拉克岩画(図七〈二〉、37)⁴² 二輪車。車軸は輿の後方に描かれる。牽引する動物には大きな角があり、馬のようにも見える。西アジアの岩画には馬のようにみえたり、牛のようにみえたりする動物がよく描かれている⁴³。この図形は、西アジアと関係しているのではないかという見解もある^{44 45}。

李家湾岩画(図七〈二〉、52)⁴⁶ 単轡二輪馬車。車軸は輿の中心部に配置する。車輪はBa式である。車轡の先端に衡が描かれ、衡の右側に一頭の馬が描かれている。

黑山岩画(図七〈二〉、54)⁴⁷ 単轡二輪車。車轡の先端に衡が描かれ、衡の一端に「人」字型の輻が描かれている。車輿は円形をしている。

廬山岩画(図七〈二〉、56)⁴⁸ 単轡二輪馬車。車軸は円形輿の中心部に配置する。車輪はC型である。車輪には6本と8本の輻がある。車轡の先端に衡が描かれ、衡の両側に馬が一頭ずつ描かれている。輿の上に矢を放つ人がいる。

野牛溝岩画(図七〈二〉、59)⁴⁹ 単轡二輪牛車。車軸は円形輿の中心部に配置する。車輪はBa式である。図形から車軸の先が車輪より突き出ていることが分かる。二頭の牛の描き方は典型的なスタイルである。

加林山岩画(図七〈二〉、60)⁵⁰ 単轡二輪車。牽引する家畜は描かれていない。車軸は円形輿の中心部に配置する。車轡の先端に衡が描かれ、衡の両側に短い線が引かれ、輻だと考えられる。

夏桑岩画(図七〈二〉、61)⁵¹ 単轡二輪馬車。車輪はBa式である。車軸は半円形の輿の後方にあるように見えるが、確定はできない。車の前方に二頭の馬が描かれる。

B地区車輛岩画の共通性を以下のようにまとめる。

(1) 単轡車が圧倒的が多い。76点の中、単轡車が69点ある。

(2) 牽引家畜の描き方には典型的なスタイルが多い。家畜が描かれた57点の中、典型的なスタイルが39点もある。

(3) この地区では馬車が大半数を占め、49点の馬車が確認された。

B地区車輛岩画の特徴をまとめると以下ようになる。

(1) 一部の車には制馭用具が描かれ、5点(図七〈二〉、35、37、45、46、55)の図形に確認が取れた。

(2) 計13点(図七〈二〉、1を除く)の車には人物が描かれ、矢を放つ人が3人、馭者が8人、輿の中に2人いる。

三、C 地区の車輛岩画

C 地区の車輛岩画はモンゴル高原の中東部、即ちハンガイ山脈東麓、アルタイ山脈の東部分、ヘンティー山脈、ゴビ砂漠、陰山、賀蘭山などの地域に広く分布している（図一）。これらの岩画は、モンゴル国のトゥブ県内のヘンティー山脈南部、ウブスハンガイ県とドンドゴビ県にまたがるハンガイ山脈、バヤンホンゴル県とウムヌゴビ県にひろがるゴビ・アルタイ山脈、中国内モンゴル自治区のシリントル盟アバグ旗、ソニド左旗、包頭市ダルハン・ムミンガン連合旗東部と北部の丘陵地帯、バヤンノール市ウラド中旗とウラド後旗南部および磴口県にまたがる陰山山脈の狼山地区、アルシャー盟アルシャー左旗内の賀蘭山西麓に集中している。これ以外に寧夏回族自治区の西北地区でも車輛岩画が見つかった（図八〈一〉、〈二〉）。20 世紀 60 年代以来、Э.А.Новгородова、Д.Наваан、Т.Санжмятав、Д.Цэвээндорж、蓋山林、達・查干、孟克德力格爾、許成、李祥石らは、それぞれの地域に調査研究を行っていた。本稿では、当該地区の 69 枚の車輛岩画、即ち 70 点の車輛図形を用いて検討する。

モリントルガイ（Морин толгой хадны зураг）岩画（図八〈一〉、1）⁵² 単轆四輪馬車。輿は前二輪の間にあり、車軸は輿の中心部に配置する。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車轆の先端に衡が描かれ、輿と後輪の間にある「V」字型の部品が興味深い。

オンゲンウゾール（Өндөрширээт сум）岩画（図八〈一〉、3）⁵³ 単轆二輪馬車。車輪は Ba 式である。輿の上に人がいる。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。

ウルジーテン（Өлзийтийн хадны зураг）岩画（図八〈一〉、8）⁵⁴ 単轆二輪車。車轆の先端に衡が描かれ、その上に「人」字型の輓が描かれている。車軸は円形輿の前方に描かれる。車輪は Ba 式である。

ビルーギーン（Билүүгийн хадны зураг）岩画（図八〈一〉、24）⁵⁵ 単轆二輪車。車軸は輿の中心部に配置する。車轆の先端に衡が描かれ、その上に「人」字型の輓が描かれている。車の右側に馬を牽く二人が行列をつくる。

テブシオーラ（Тэвш уулын хадны зураг）岩画（図八〈一〉、10）⁵⁶ 単轆四輪馬車。車輪は C 型である。輿は前二輪の間にあり、轆の先端に衡が描かれている。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車の隣に矢を放つ人と動物が描かれる。図形は戦争の場面か、狩猟の場面か、ここでは判断できない⁵⁷。

ビチゲテンアム（Бичигтын амны хадны зураг）岩画（図八〈一〉、18）⁵⁸ 単轆二輪車。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。その家畜は馬に見えるが、特定できない。車輪は C 型である。車軸は方形輿の中心部に描かれ、二輪の中の一つには 11 本の輻が描かれ、もう一つには 12 本の輻が描かれている。

ハブチャーガイト（Булган сум）岩画（図八〈一〉、35）⁵⁹ 単轆二輪車。車軸は方形輿の中部に描かれる。車轆の先端に衡が描かれ、その上に「人」字型の輓が描かれている。

夏哈尼努如岩画（図八〈一〉、5）⁶⁰ 単轆二輪駝車 2 台。各車には幌が付けられ、牽引する駱駝が

一頭ずつ描かれている。また車と車の間に羊のような動物が描かれ、線刻の痕跡から車は駱駝より後の時代に描かれたことが分かる。

呼和朝魯岩画（図八〈一〉、28）⁶¹ 単轅二輪馬車。車輪はBa式である。車軸は長方形輿の中部に描かれている。車轅の先端に衡が描かれ、その上に「人」字型の軛が描かれる。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。また、車の下に動物が描かれている。

哈登布查岩画（図八〈一〉、34）⁶² 双轅二輪車。車は側面からの表現だが、幌と車の中にいる人が正面から描かれている。車輪はC型である。車轅には馭者のような人物が描かれている。

超倫翁格其岩画（図八〈一〉、37）⁶³ 単轅二輪馬車。車軸は輿の中心部に配置する。車轅に衡が描かれ、その前方に牽引する家畜が描かれる。

後候哈達岩画（図八〈一〉、38）^{64 65} 単轅二輪車。車の前方に衡と軛が描かれ、衡の下に「V」字型の部品がある。

道頭山岩画（図八〈一〉、45）⁶⁶ 単轅二輪馬車。車輪には丸い点が描かれ、その点が轂を表しているかもしれない。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。輿の上には馭者のような人物が描かれ、脚が車軸のところに置かれ、頭は外向きにしている。車の後方に馬のような動物が描かれている。また、車の両側に道路が2本の線で表現されている。道路の左側に三頭の馬、右側に一頭の馬が描かれる。このような平行線で道路を表すのは推喇嘛廟一帯によく見られる例である。

再日瑪格岩画（図八〈二〉、52）⁶⁷ 単轅二輪馬車。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車軸は方形輿の中心部に配置する。また車轅に衡が描かれる

德里格爾花岩画（図八〈二〉、53）⁶⁸ 馬車。車轅に衡が描かれる。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。円形輿の中に人が描かれ、輿の中に座っているのではないかとみる学者もいる⁶⁹。だが、筆者は馭者だと考えている。車のそばに大きな角を持つ鹿が描かれたことは、狩猟の場面ではないかと思われる。

幾公海勒斯太岩画（図八〈二〉、59）⁷⁰ 二輪車。この車は側面からみた表現だが、風格からみると、双轅輪だと思われる。輿の上に幌が付けられ、解放營子遼墓の壁画にも似たようなものがある⁷¹。

拖林溝岩画（図八〈二〉、61）⁷² 単轅二輪馬車。車軸は輿の中心部に配置する。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。

哈哈図岩画（図八〈二〉、62）⁷³ 単轅二輪車。車軸は輿の中心部に描かれ、轅の先端に衡が描かれる。

賀蘭口岩画（図八〈二〉、63）⁷⁴ 単轅二輪馬車。車轅に衡が描かれる。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車の後方に動物が描かれている。この岩画は、風化して破損が激しいため、車輪、車軸と輿の型式の詳細が分からない。

四眼井岩画（図八〈二〉、65）⁷⁵ 双轅二輪馬車。この車は側面からみた表現である。車輪には8本の輻が描かれ、車軸、轂などもよくわかるように描いている。

大麦地岩画（図八〈二〉、69）⁷⁶ 単轅二輪馬車。牽引家畜の描き方は典型的なスタイルである。車軸は輿の前方に描かれる。轅の先端には衡はあるが、軛はない。また、車の前方に羊のような動

物が描かれている。

C 地区車輛岩画の共通性をまとめると以下ようになる。

(1) 単轆車は比較的多い。70 点の中、双轆車が 5 点あり、単轆車が 59 点あり、残りの 6 点については詳細が分からない。

(2) 牽引家畜の描き方には典型的なスタイルが多い。家畜が描かれた 46 点の中、典型的なスタイル 36 点もある。

(3) この地区では馬車が大半数を占め、46 点の馬車が確認された。

C 地区車輛岩画の特徴を以下のようにまとめる。

(1) 計 3 点 (図八 〈一〉、9、10、12) の図形には、制驭用具が描かれている。

(2) 駝車は非常に少ない。内モンゴル自治区のシリングル盟アバグ旗夏哈尼努如岩画の 2 台の駝車しかない (図八 〈一〉、5)。

(3) 一部の車には、軸の轂のような部分が細かく描かれている (図八 〈一〉、22、39、45、図八 〈二〉、60、65)。

おわりに

以上の検討の基にユーラシア草原中東部の車輛岩画の分布と特性を整理し、その伝播ルートについて述べることで結語に代えたい。

(1) 車輛岩画の統計 (表二) からみると、173 点の車輛図形の中、双轆車が 8 点あり、単轆車が 150 点もあり圧倒的である。単轆車より双轆車の出現時期が遅いというのは一般的である。ユーラシア草原中東部では、単轆車が主流の時期に車輛岩画が多くあるのに対して双轆車の出現と同時に車輛岩画も衰退していく傾向が見られる。

(2) 車輛岩画はバルハシ湖の南東部、アルタイ山脈、ハンガイ山脈およびゴビ砂漠 (モンゴル国南部、中国内モンゴル自治区北部) に集中し、天山山脈中東部、チベット高原北部、賀蘭山、陰山および河西回廊にも分散している。この分布から車輛岩画の伝播ルートは河西回廊のみならず、アルタイ山脈北麓もその東漸の道であったことが分かる。

(3) さらに詳しくみると、バルハシ湖の南東部、アルタイ山脈北麓、ハンガイ山脈および内蒙古中部では四輪車岩画が多くあるのに対して中国の新疆、甘肅、青海、チベット、寧夏および内蒙古西南部ではまだ発見例がない。二輪車と違って四輪車の伝播は、アルタイ山脈北麓が主たるルートである。

車の伝播において、アルタイ山脈とハンガイ山脈は主要な地域である。また、四輪車が出現する前に二輪車は各地に広まっていた。これらの地域では、二輪車と四輪車が一時的に併存していたことも考えられる。なぜ、殷周時代の中国には二輪車が主流であったのか。なぜ、甲骨文字と金文には二輪車の図形しかなかったのか。これらの問題を解決するには、今後の調査の進展を待ってさらに考察を深めていきたい。

注

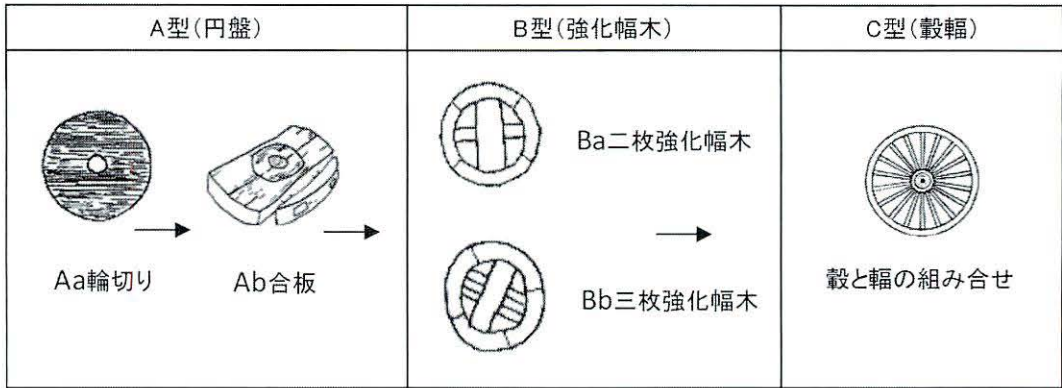
- 1 4 6 19 龔纓晏 2005「車子の演進与伝播－兼論中国古代馬車の起源問題－」『浙江大学学报·人文社会科学版』2005－3
- 2 3 71 劉永華 2002『中国古代車輿馬具』上海辞書出版社
- 5 郭物 2005「馬背上的信仰－欧亚草原動物風格芸術－」人民美術出版社
- 7 8 9 12 13 43 Andrzej Rozwadowski, *Symbols Through Time: Interpreting the Rock Art of Central Asia*, Institute of Studies Adam Mickiewicz University, 2004.
- 10 R. Sala, and J. Deom, *Petroglyphs of South Kazakhstan*, Almaty, 2005.
- 11 A. Rogozhinsky, *Rock Art Sites of Central Asia: Documentation Conservation, Management, Community Participation*, Almaty, 2004.
- 14 蓋山林 2009『絲綢之路岩画研究』新疆人民出版社
- 15 29 32 42 46 蘇北海『新疆岩画』新疆美術攝影出版社
- 16 26 48 E. E. Kuzmina, *the Perhistory of the Silk Road*, University of Pennsylvania Press, 2007.
- 17 27 28 30 36 37 56 Э.А.Новгородова 2005「蒙古山中的古代車輛岩画」『欧亚草原岩画芸術論集』中国人民大学出版社
- 18 34 35 70 蓋山林 2001『世界岩画的文化闡釈』北京図書館出版社
- 20 筆者の2007年7月15日に内蒙古赤峰市克什克騰旗達日罕飼烏拉蘇木で行われた調査による。
- 21 О. Ватсайха. Монголчууд 20 зууны эхэнд зурагт түүх. УБ., 2012 он.
- 22 茨城県立歴史館編 1996『大草原の遊牧の民－チンギス・ハーンとその末裔たち－』
- 23 24 25 40 57 川又正智 1994『ウマ駆ける古代アジア』講談社
- 31 38 日本国立民族学博物館編 1986『国立民族学博物館展示案内』講談社
- 33 田広金、郭素新 2005『北方文化与匈奴文明』江蘇教育出版社
- 39 52 53 54 55 58 59 Т. Санжмятав. Монголын хадны зураг. УБ., 1995 он.
- 41 Institute of Archaeology Mongolian Academy of Sciences and National Museum of Mongolia, *Treasures of the xiongnu: Culture of xiongnu, the first Nomadic Empire in Mongolia*, Ulaanbaata, 2011.
- 44 張志堯 1985「阿勒泰市古代車輛岩画」『絲綢之路造型芸術』新疆人民出版社
- 45 郭物 2011「通過天山的溝通－從岩画看吉爾吉斯坦和中国新疆在早期青銅時代的文化連系－」『西域研究』2011－3
- 47 楊惠福、張軍武 2001『嘉峪関黒山岩画』甘肅人民出版社
- 49 湯惠生、張文華 2001『青海岩画－史前芸術中二元対立思維及其觀念的研究－』科学出版社
- 50 51 洛桑扎西 2002「那曲尼瑪県夏桑、加林山岩画調查簡報」『西藏研究』2002－3
- 60 薩仁蘇和、斯仁那德米德 2007『阿巴嘎岩画』内蒙古人民出版社
- 61 62 達·查干 2008『蘇尼特岩画』内蒙古人民出版社
- 63 64 66 67 68 69 蓋山林 1989『烏蘭察布岩画』文物出版社
- 65 筆者の2011年9月30日の調査による。

- 72 蓋山林 1986『陰山岩画』文物出版社
73 蓋山林 2002『内蒙古岩画的文化解读』北京図書館出版社
74 筆者の 2011 年 7 月 12 日の調査による。
75 76 許成、衛忠 1993『賀蘭山岩画』文物出版社

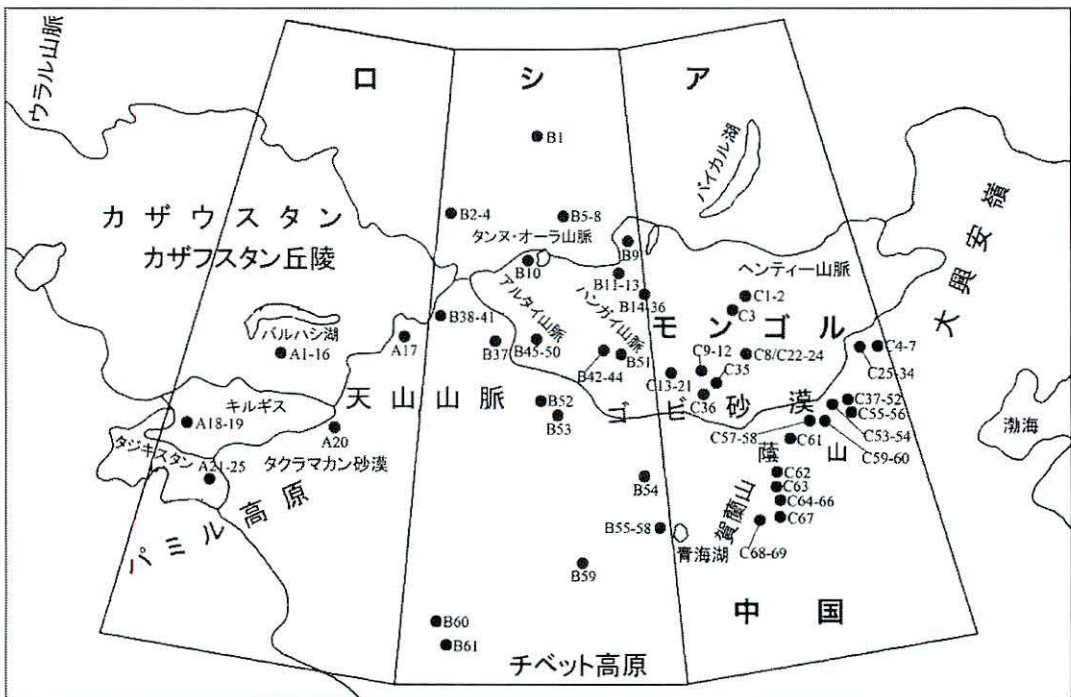
訳者参考文献

- 朝日新聞社ほか 1990『大英博物館展－芸術と人間－』図録
本城靖久 1993『馬車の文化史』講談社
古澤義久 2015「咸鏡北道茂山郡芝草里岩刻画をめぐる諸問題－東北アジア岩画の編年と系統－」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 29 号

表一 車輪の変遷過程



(注：原図の元に訳者が再編)



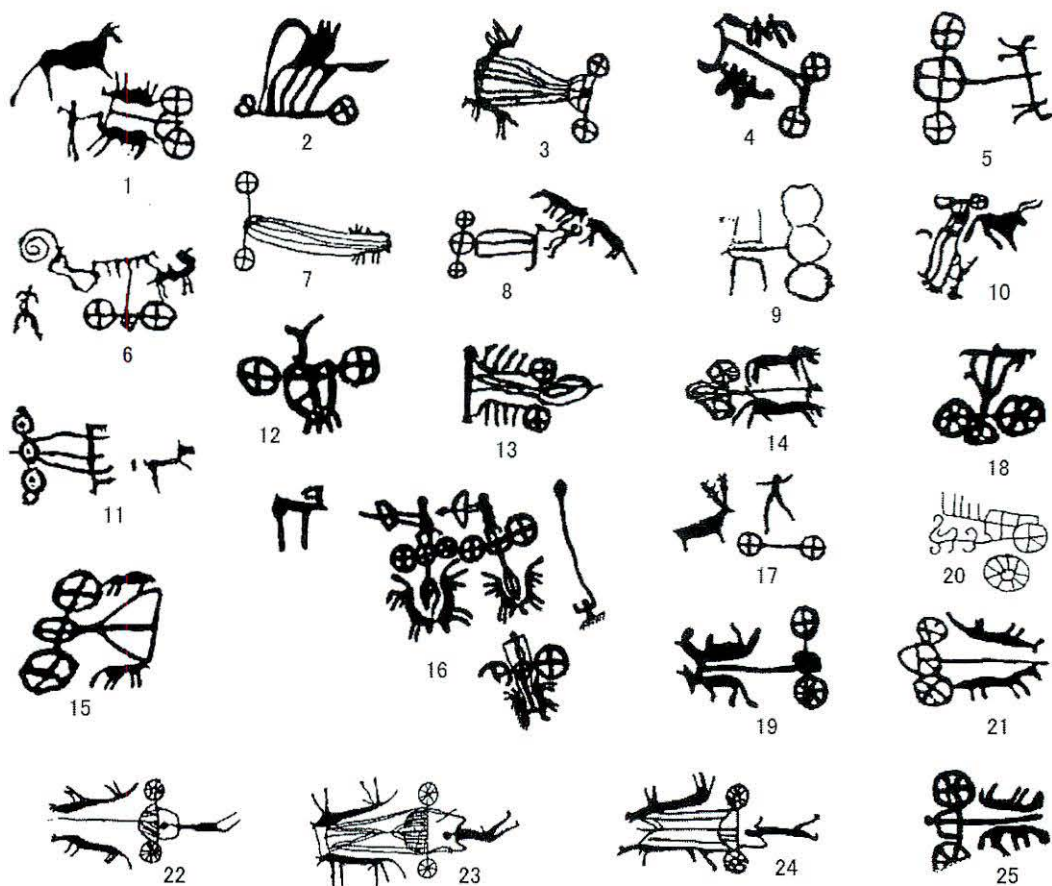
図一 ユーラシア草原中東部における車輛岩画の分布

(注：原図の元に訳者が作成)

表二 ユーラシア草原中東部の車輛岩画

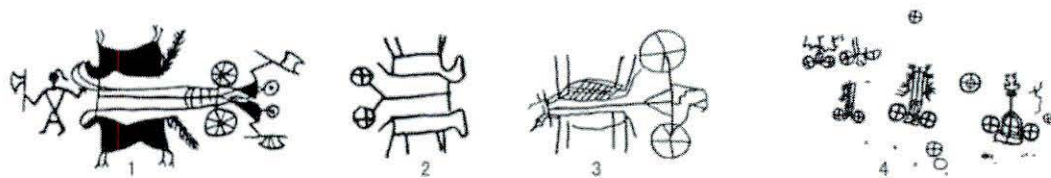
地区			A 区	B 区	C 区	合計
車輛岩画			25	61	69	155
車輛図形			27	76	70	173
車輪	車輪数	二輪	26	73	60	159
		四輪	0	1	3	4
		車輪数不詳	1	2	7	10
	型式	B 型	15	8	6	29
		C 型	3	16	12	31
		型式不詳	9	52	52	113
	車軸が描かれた車		22	65	48	135
	車軸が車輪より突き出る車		0	9	8	17
轆衡	車轆	単轆車	22	69	59	150
		双轆車	0	3	5	8
		車轆数不詳	5	4	6	15
	衡軛	衡が描かれた車	16	53	40	109
		軛が描かれた車	3	7	7	17
輿幌	輿が描かれた車		22	54	51	127
	幌が描かれた車		0	3	5	8
制御用具	手綱が描かれた車		4	5	3	12
牽引家畜	牽引家畜が描かれた車		17	57	46	120
	家畜	駱駝	1	1	2	4
		牛	0	1	0	1
		馬	15	49	43	107
		詳細不詳	1	6	2	9
	スタイル	典型的なスタイル	14	39	36	89
		非典型的なスタイル	3	14	7	24
		スタイル不詳	0	4	3	7
人物（馭者、乗客、射手など）が描かれた車			6	13	10	29

注：原図の元に訳者が再編



図二 A地区の車輛岩画

- 1.Gavaevka 2、4、8、12、13. 発見場所不詳 3、5、6、7、10.Karakyr 9、11.Moinak 14.Zaysan 15.Kol-bulak
16.Arpaufen 17. 新疆伊米里河 18、19.Ala-Too 20. 新疆阿克蘇地区温宿県包孜東 21.Gorno-
Badakhshanskaya 22. 発見場所不詳 23、24.Acre River 25.Tekke-Tash

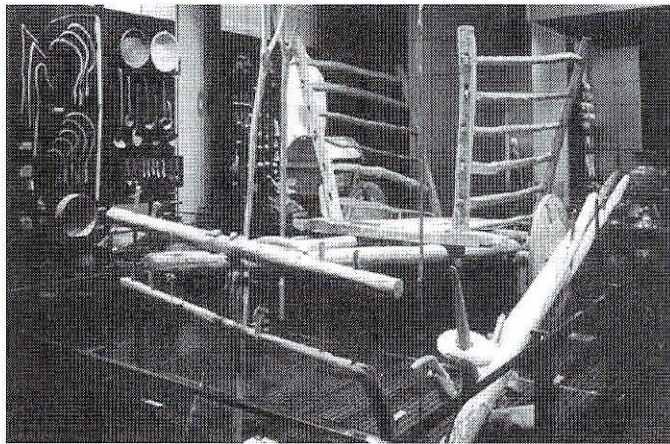


図三 南アジア、西アジア、北アフリカ、北欧で発見された典型的なスタイルの車輛岩画

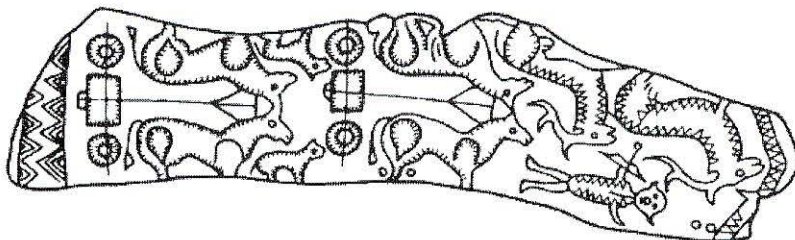
1. インド 2. アラビア半島 3. ニジェール 4. スウェーデン



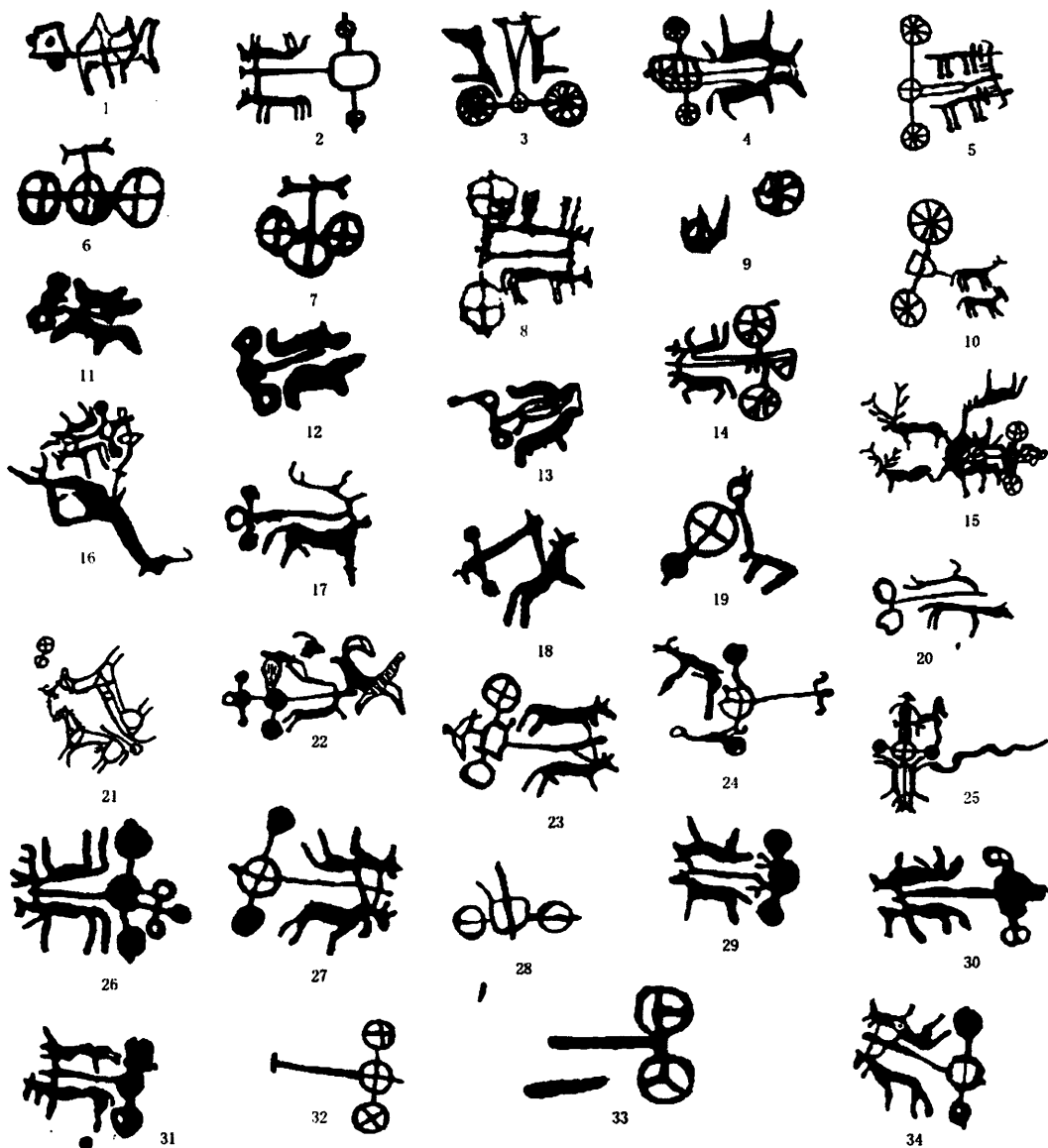
図四 20世紀初頭、モンゴル国ハンガイ山地区における車輪（Ba式）製作風景



図五 西アジアの二衡単轆車



図六 南山根102号墓「駕車首領紋」骨板



図七 (一) B地区の車輛岩画

1. ロシアのエニセイ川流域

24. アルタイ共和国のカトゥニ川流域

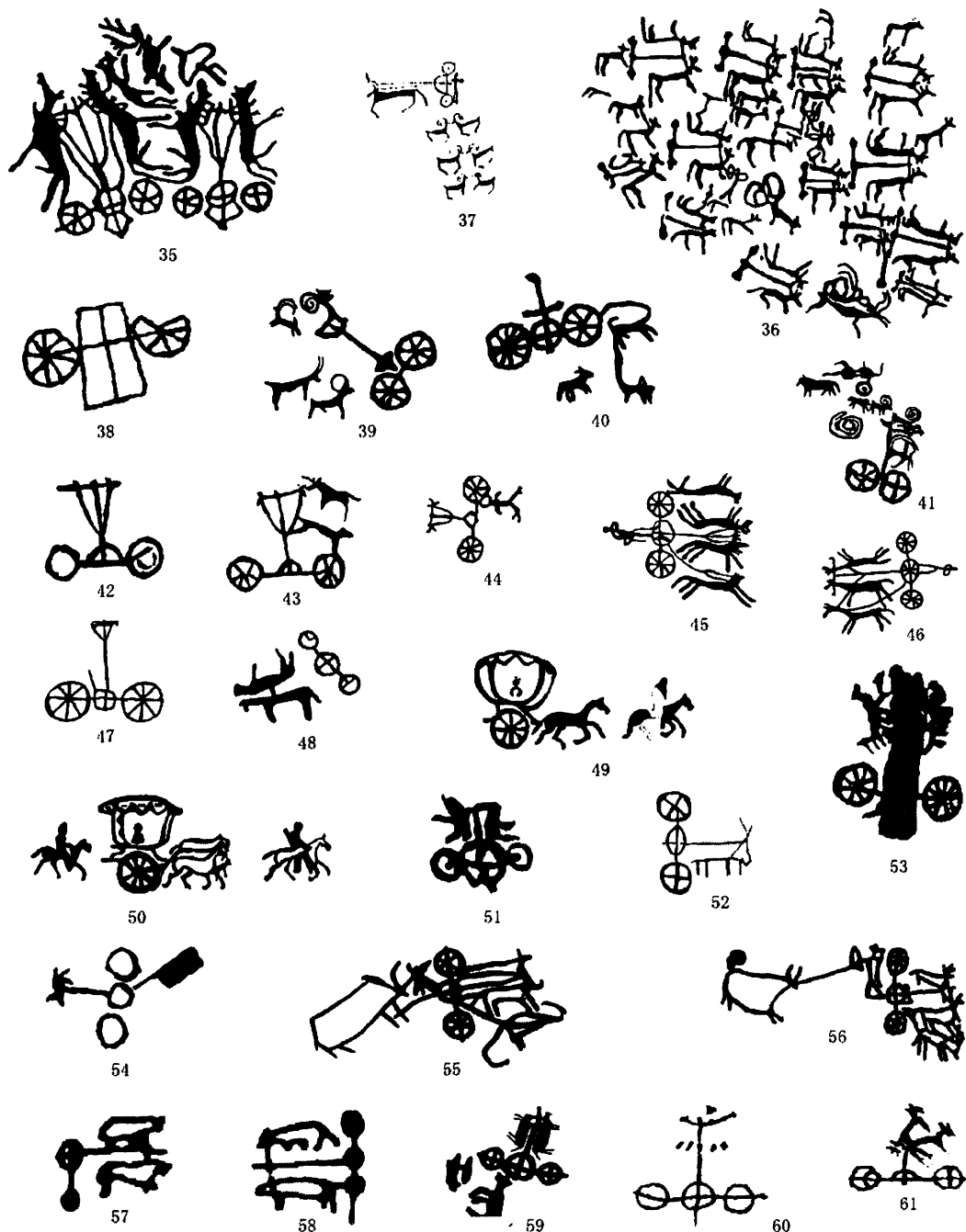
5-8. トゥヴァ共和国の Chinge 川流域

9-18、20、22-34 モンゴル国の岩画：9. フブスグル県 Ulaan-Uul 10. オブス県 Sagit

11-13. フブスグル県 Tsetserleg 14-18、22-28、31、32、34. アルハンガイ県 Bugat

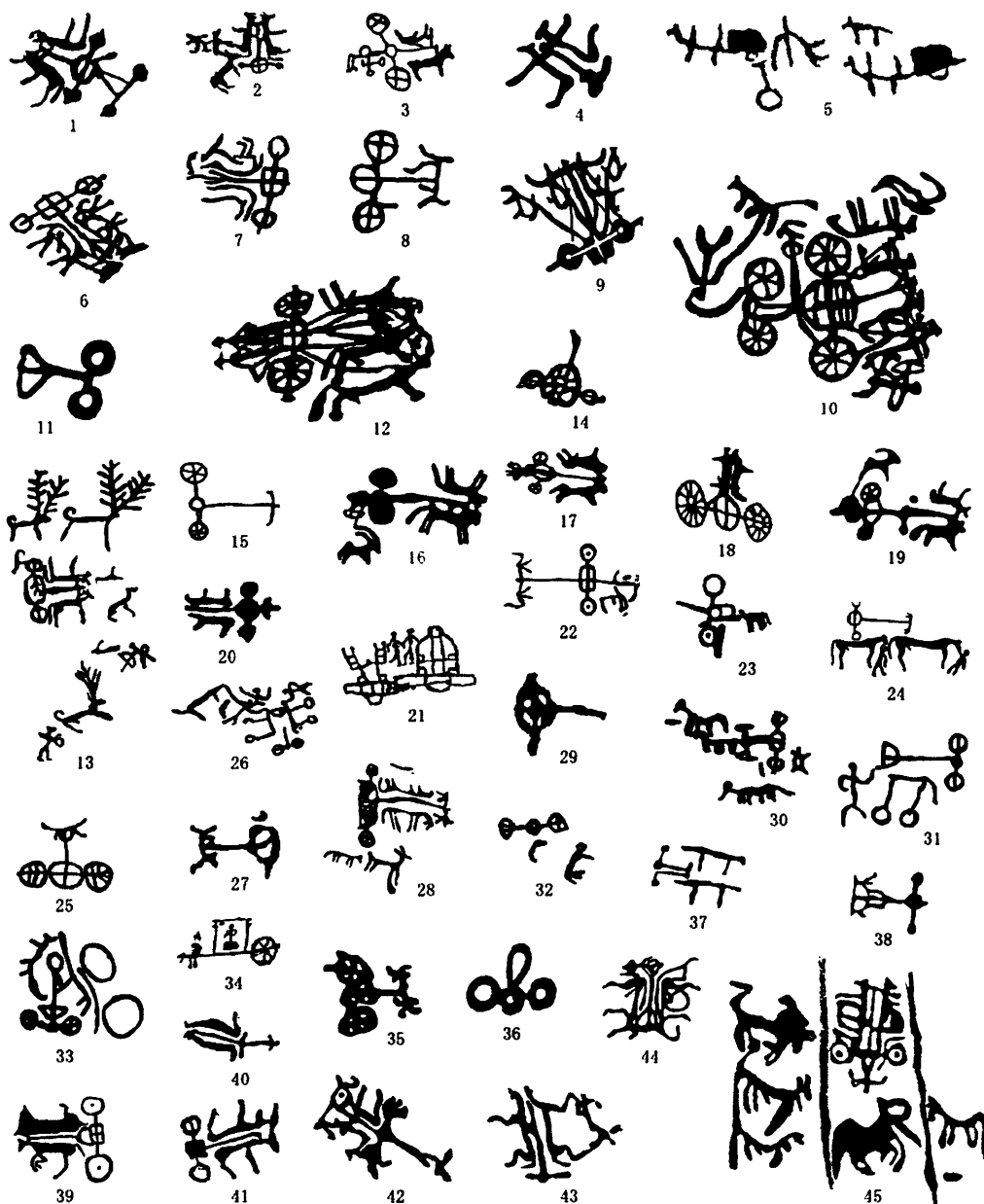
20. アルハンガイ県 Yurgis 29、30. フブスグル県 Elt 33. フブスグル県 Jargalant

19、21. 発見場所不詳



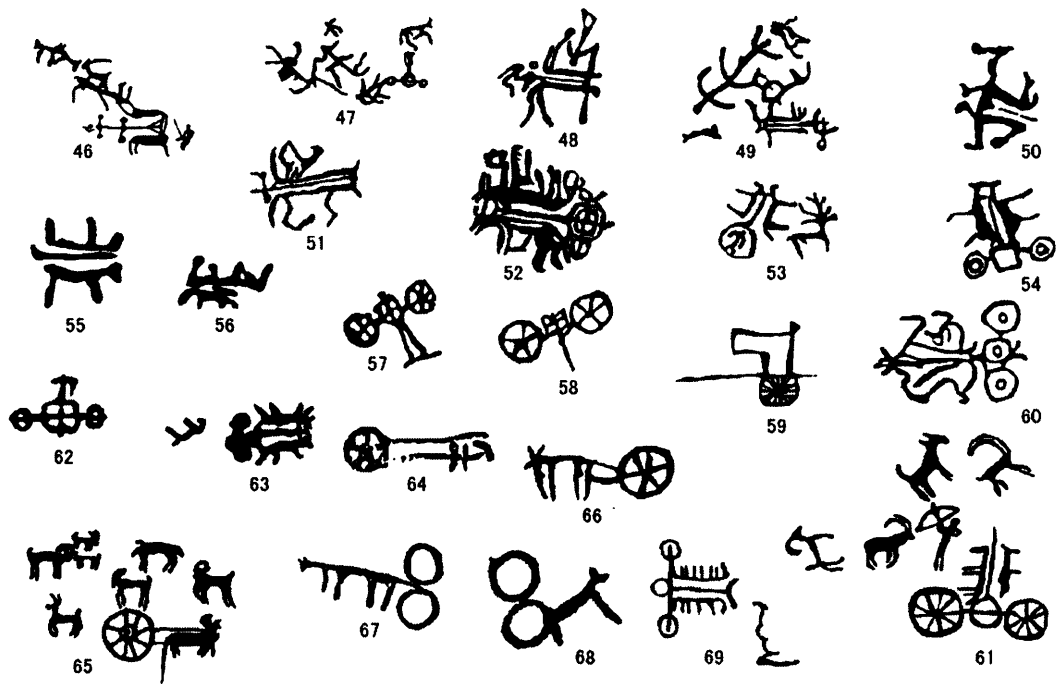
図七〈二〉 B 地区の車輛岩画

- 35、36、42-51. モンゴルの岩画 :35.Архангай аймаг
 36.Хөвсгөл аймаг Баянзүрх сум Бичигт булагийн хадны зураг
 42-44.Говь-Алтай аймаг Халиун сум Цагаан голын хадны зураг
 45-50.Ховд аймаг Үенч сум Ямаан усны хадны зураг
 51.Говь-Алтай аймаг Бигэр сум Бичигт хадны хадны зураг
 37-41、52、53. 新疆の岩画 :37. 阿勒泰地区烏吐布拉克 38-41. 阿勒泰地区吉木乃県塔特克什闊臘斯
 52. 哈密地区巴里坤哈萨克族自治县李家湾 53. 哈密地区哈密市白山
 54. 甘肅嘉峪関市黒山
 55-59. 青海の岩画 :55-58. 海西州天峻県盧山 59. 海西州格爾木市野牛溝
 60、61. 西藏の岩画 :60. 那曲地区尼瑪県戎馬郷加林山 61. 那曲地区尼瑪県岡龍郷夏桑



図八 (一) C 地区の車輛岩画

- 1-3、8-24、35、36. モンゴルの岩画 : 1、2. Төв аймаг Алтанбулаг сум Морин толгойн хадны зураг
 3. Төв аймаг Өндөрширээт сум 8. Дундговь аймаг Өлзийт сум Өлзийтийн хадны зураг
 9-12. Өвөрхангай аймаг Богд сум Тэвш уулын хадны зураг
 13-21. Баянхонгор аймаг Баянлиг сум Бичигтын амны хадны зураг
 22-24. Дундговь аймаг Өлзийт сум Билүүгийн хадны зураг
 35. Өмнөговь аймаг Булган сум 36. Өмнөговь аймаг Ноён сум Аравжихын хадны зураг
 4-7、25-34. 内モンゴルシリングル盟の岩画 : 4-7. アバク旗別力古台鎮夏哈尼努如
 25-31. ソニド左旗洪格爾蘇木呼日和朝魯 32、33. ソニド左旗陶来 34. ソニド左旗哈登布查
 37-49. 内モンゴル包頭市タルハン・ムミンガン連合旗の岩画 : 37. 朝倫翁格其 38. 後候哈達
 39、41-44. 查干敖包蘇木推喇嘛廟 40. 五花敖包 45. 道頭山



図八〈二〉 C 地区の車輛岩画

- 46-56. 内モンゴル包頭市ダルハン・ムミンガン連合旗の岩画：46、47. 畢其格淖爾 48. 查干淖爾 49. 朝格親額黑
 50. 宝勒図 51、52. 再日瑪格 53、54. 德里格爾花 55、56. 阿日貢
 57-61. 内モンゴルバヤンノール市の岩画：57、58. ウラド中旗布日格斯太溝 59、60. ウラド中旗幾公海勒斯太
 61. 磴口県沙金套亥蘇木拖林溝
 62. アルシャー盟アルシャー左旗宗別里蘇木哈哈図
 63-69. 寧夏の岩画：63. 銀川市賀蘭県賀蘭口 64-66. 青銅峡市四眼井
 67. 中衛市中寧県石馬湾 68、69. 中衛市沙坡区大麦地